Océ VarioPrint 6000 Ultra Series

導入事例 コマツゼネラルサービス株式会社 栃木県

全体的な生産性や効率が上がって、
以前とは働くスタイルや意識が変わりました。
意識の面では、なんといっても
「抜群の安心感」があります。

KEY PERSON

資料制作事業本部
ディストリビューションセンタ
所長
宇田川 清氏

資料制作事業本部
ディストリビューションセンタ
主任
小野塚 隆氏

資料制作事業本部
ディストリビューションセンタ
清宮 裕行氏

□コマツグループのディストリビューションセンタとして設立

コマツゼネラルサービス株式会社は、コマツグループのディストリビューションセンタとして1976年に設立。不動産・建設事業をはじめ、別荘地管理事業、保険事業、人材事業など、幅広い領域で事業を展開している。印刷部門では、主にコマツの製品に付属するマニュアル類の出力を担当。同部門で使用していた以前のプリンターでは故障やトラブルが多発していたため、大量ページの印刷に耐えうるプリンターとの入れ替えを検討し、2012年にOcé VarioPrint 6320 Ultraの国内1号機／2号機を導入した。

その導入に至った背景と目的、効果について、同社所長 宇田川清氏と主任 小野塚隆氏、清宮裕行氏にお話を伺った。

導入した背景と経緯、その効果など

御社の業務内容と主な印刷内容をお聞かせください。

宇田川氏：
当事業所はコマツグループのディストリビューションセンタです。印刷物に関わる部署では、主に本社コマツの製品に付属する取り扱い説明書や部品明細書、整備員専用のマニュアルを印刷する業務を担当しています。

弊社で扱っているマニュアル類ははいずれもページ数が多いのが特徴です。取扱説明書は400～430ページくらいのものが多く、部品明細書は2,000ページ以上、整備員専用マニュアルは2,000ページくらいで8cmバインダーに目一杯入れて2分冊にしています。使う紙は普通のA4の紙で、表紙やバインダーは国内用と海外用に2種類使っています。

今回、Océ VarioPrint 6320 Ultraの導入に至った背景をお聞かせください。

小野塚氏：
VarioPrint 6320 Ultraを導入する前は、他社のプリンターを2台使用していました。ただ、好景気の頃にはかなりの出力ボリュームがあったこともあり、残業をしないと納期に間に合わなくなるようなことがありました。

そのため、もっと長時間の使用に耐えられるプリンターを探していたところ、以前からお付き合いのあったキヤノンさんからOcéのVarioPrint 6320 Ultraをご提案いただいたわけです。それが導入を検討するきっかけですね。

宇田川氏：
その後、実際に現在の1日のジョブにあたる11万7000ページをショールームに持ち込んで、検証デモをしていただきました。その結果、今まで650分かかっていたジョブが403分で完了させることができたのです。また、そのデモの最中には紙詰まりが1度もありませんでした。出力速度においても、VarioPrint 6320 Ultraの314ページ/分というのはかなりの生産性アップが見込めました。これらが導入の決め手です。

弊社はVarioPrint 6320 Ultraの国内1号機と2号機を導入するということで、アフターサービスがどうなのか、万一の故障の際の部品はどうなるのかなど、いくつか不安材料もありました。弊社で扱うマニュアル類はページ数がかなり多いので、定期点検で消耗品を年中取り替えるような機械だと作業が間に合わなくなる可能性があります。その点、VarioPrint 6320 Ultraは耐久性も高く、ピーク時の膨大な印刷量にも耐え得るスペックでした。

生産性が向上したことで、出力作業に変化はありましたか?

清宮氏：
導入前は7～8時間かかっていた出力作業が、いまは5～6時間で終わっています。以前は1時間早く出社し、加えて2時間ぐらい残業がありまし

たが、その時間が単純に減るだけではないんですね。これまで手が回らなかった作業ができるようになり、全体的な生産性や効率が上がって、以前とは働くスタイルや意識が変わりました。意識の面では、なんといっても「抜群の安心感」があります。

宇田川氏：
先代機は故障やトラブルが多く、「今日は動くけど明日は動くかわからない」という不安がありました。そのため、機械が動くときに出せるだけ出力しておこうと考えてしまい、本来必要ではないはずの残業が発生していました。当たり前のことですが、「明日もちゃんと動くから大丈夫」という安心感は、こういう大きな機械にはなくてはならない大事な性能だと再確認しました。

小野塚氏：
以前は作業フロアに印刷物が山のように積んである状態でしたから……。それが震災のときに崩れてしまって、とっさに押さえた記憶があります。今は、機械を信頼できるので、出荷が近いものだけを印刷しています。そのため、印刷物がフロアのスペースを占領してしまうようなこともなくなりました。

少し大袈裟かもしれませんが、VarioPrintを導入することで「いつでも出力できる」=「好きなときに仕事ができる」という、本当の意味のオンデマンドをやっと実感できた気がします。

実際の導入時のことを詳しく教えていただけますか?

清宮氏：
まず導入前に、事業所内でメインで操作する3名がキヤノンのショールームに伺って操作教育を受け、導入した際にはメンテナンス時の部品交換の方法などを丁寧に教えていただきました。また、導入直後に操作が煩わしくならないように、普段の出力設定に使用する8種類の出力パターンをすべてテンプレートとして事前に作っていただきました。それはとてもありがたかったです。

また、導入の際には、フロアのレイアウトを考えて、出力後の工程が作業しやすくなるように設置しました。導入を機会に、いままでは手が回ってなかったようなところまで改善されています。

操作感についてはいかがでしょうか? とくに便利だと思う機能などがあれば教えてください。

清宮氏：
基本的に以前と操作は変わらないですが、パソコンから送信したジョブが印刷機のタッチパネルで操作できるようになったのは便利ですね。

それと、スケジュール機能がとても便利です。先代機では所要時間が表示されなかったため、出力が完了する時間は勘で考えるしかありませんでしたが、VarioPrint 6320 Ultraのスケジュール機能なら、おおよその所要時間も画面に表示されます。定時間際にここまでは出力したいというジョブを滑り込ませても、すぐに所要時間がわかるので、「あと10分で終わるなら済ませてしまおう」とか「終わらないなら明日の作業にまわそう」などの細かい判断が以前より楽になりました。

印刷の精度や品質はいかがですか?

清宮氏：
紙が奇麗に揃って出力されるのが素晴らしいですね。以前はジョブの分かれ目にバナーシートというのが飛び出していましたが、出力された用紙がきちんと整頓されていなかったため、結局ジョブの分かれ目を判別するのが大変でした。その点、VarioPrint 6320 Ultraなら分かれ目が一目瞭然でわかるため、用紙を揃える作業が前より大幅に削減されました。

低温で印刷してるので波打ちが少なかったり、表裏のズレもなく、美しい仕上がりです。また、VarioPrint 6320 Ultraは動作が静かな点も良いところだと思います。

Océ VarioPrint 6320 Ultraの安定性を活かした、今後の展望をお聞かせください。

小野塚氏：
さきほどもいいましたが、VarioPrint 6320 Ultraを導入して、改めてオンデマンド印刷の価値を実感しています。せっかく優秀な機械を導入したのですから、「どれだけ早く出力できるのか」という強みをもっと明確化し、現在、受注しているメインの仕事に加えて、オンデマンド印刷を付加価値として営業促進ができればと考えています。

宇田川氏：
導入から、もうすぐ1年。梅雨の時期と猛暑の夏、そして冬も乗り越えて、問題なく季節をめぐってきましたので、動作の安定感にはとても満足しています。

現在は月間約350万カウントなので、まだまだ出力速度に対して作業時間に余裕があります。当事業所のまわりには工業団地が多いので、VarioPrint 6320 Ultraの稼働率を上げるためにもマニュアル類や説明書など、ページ数の多い仕事を増やしていきたいと思っています。また、受注が増えたときに最大限の能力を発揮できるよう、さらに作業工程などの見直しや改善を図っていきたいですね。

Canon キヤノンマーケティングジャパン株式会社
〒108-8011　東京都港区港南2-16-6　CANON S TOWER